



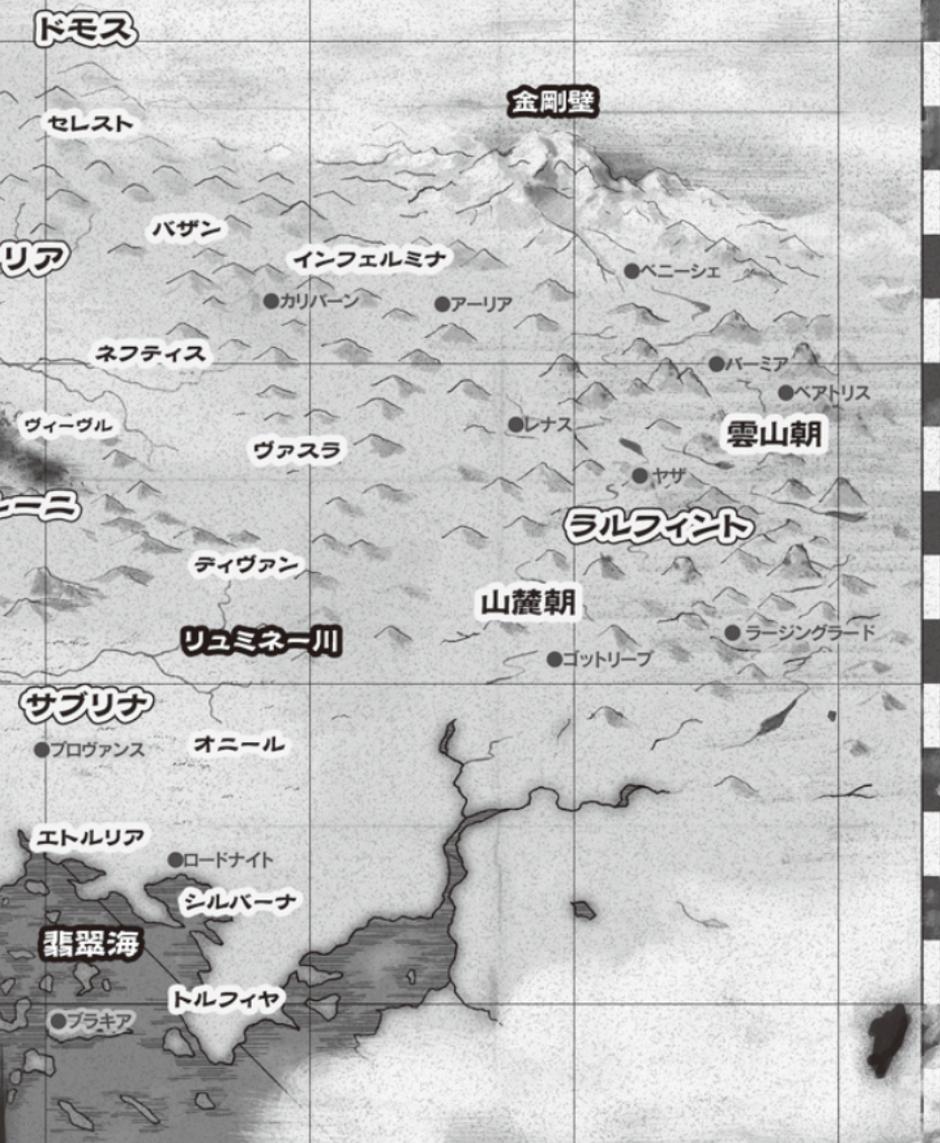
# ハレム サーヴァント

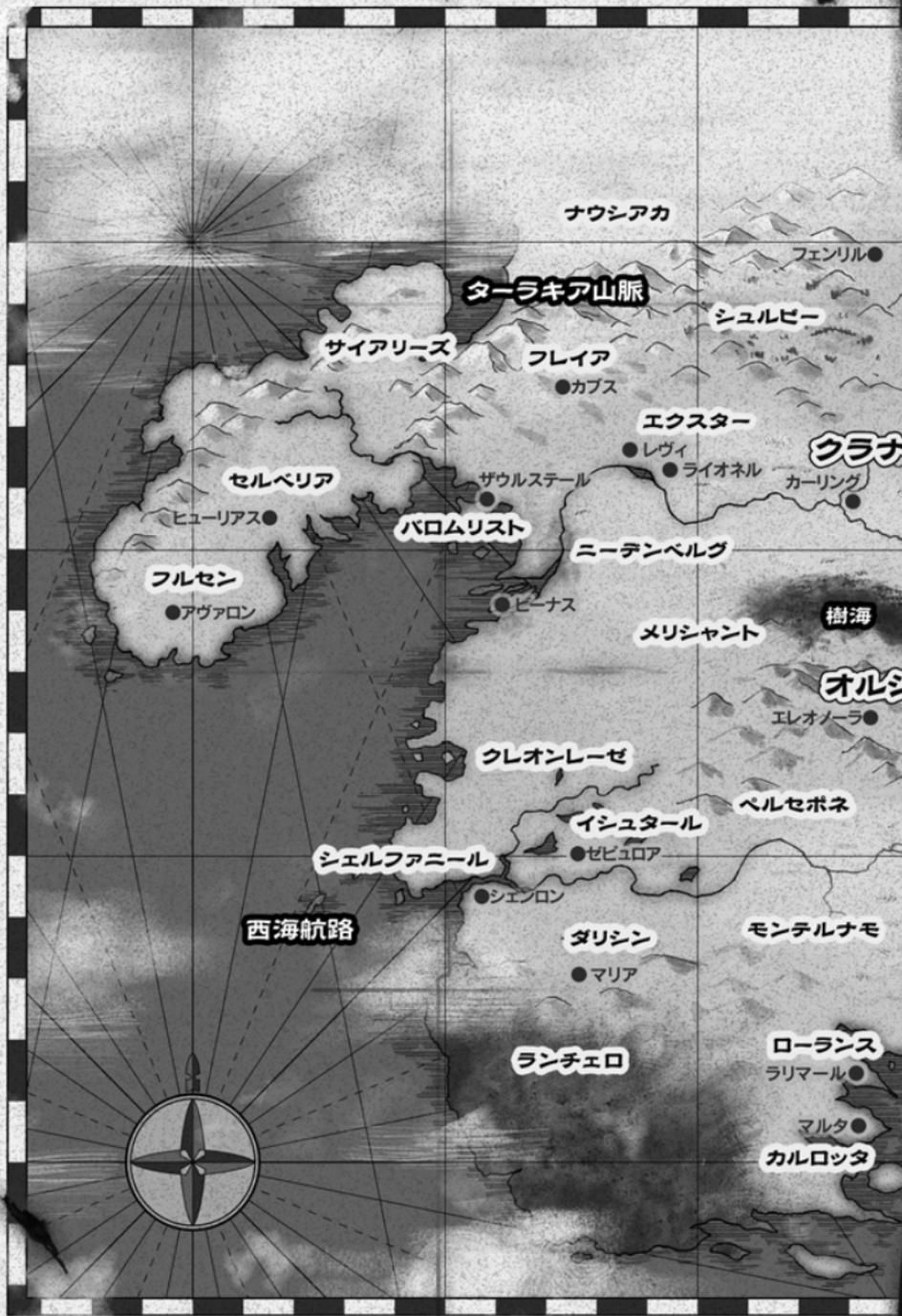
HAREM SERVANT

小説 竹内けん 挿絵 神保玉蘭

立ち読み版

# ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル●

**ターラキア山脈**

シュルビー

サイアリーズ

フレイア

●カブス

エクスター

●レヴィ

●ライオネル

**クラナ**

カーリング●

セルベリア

ザウルステール

ヒューリアス●

**バロムリスト**

ニューテンベルグ

フルセン

●アヴァロン

●ビーナス

メリシャント

**樹海**

**オルシ**

エレオノーラ●

クレオンレーゼ

ベルセボネ

イシュタール

●ゼビュロア

シエルファニール

●シェンロン

**西海航路**

ダリシン

モンテルナモ

●マリア

**ランチェロ**

ローランス

ラリマール●

マルタ●

**カルロッタ**



## 登場人物紹介

Characters

### オフィーリア

バタフライ家の現当主を務める少女。  
セクシーな衣装に身を包み、知略を  
巡らすことを得意としている。

### セドリック

バタフライ家の騎士になるためにやって  
きたが、執事として雇われてしまう少年。



## ターニャ

バタフライ家のすべての使用人を取りまとめ、オフィーリアの世話役を務める有能な女執事。



## シャーリー

オルシーニ・サブリーナ二重王国の女騎士。オフィーリアに寝返るよう促すためにやってきた。

第一章

胡蝶の城

009

第二章

乙女たち

050

第三章

執事のお仕事

082

第四章

花園の誓い

122

第五章

妖女の姦計

157

第六章

毒蛾の鱗粉

204



「出ていきなさい！」

叱られたセドリックは転がるようにして執務室を出た。

その背後では怒りの収まらないオフィーリアが、第一の側近にあたり散らしている。

「ターニャ、あなたがしつかり教育しないからこういうことになるのよ」

「はい。お嬢様」

主人のやつあたりも、ターニャは冷静に受けている。

※

「オフィーリア様のご命令です。あなたにお嬢様のオナニーのやり方を教育いたします。よろしいですね」

主人の激怒を買ったセドリックが悄然と、台所で食器の後片付けをしていると、颯爽とターニャがやってきた。

貴族の城館の台所である。一度に百人、千人単位の食事を作ることもあるのだから、当然広い。

「はい」

セドリックは神妙に頷いた。

「その前に一つ確認しておきましょう。お嬢様は比類なき名門たるバタフライ家の当主。すなわち貴族です。あなたは単なる使用人ですよ。そこを弁<sup>わきま</sup>えていますか？」

「はい」

ターニヤの言わんとしていることは痛いほどわかった。

オナニーの世話をすることになっても、決してセドリックとオフィリアが結ばれることはない、ということだ。

「わたしにとって、お嬢様とはそういう対象ではありません」  
惚れたはれたではない。もっと、尊いものなのだ。

セドリックの言わんとしているところを察してくれたのか、ターニヤは口元に微笑を浮かべた。

「まあ、よろしいでしょう。それならば、わたくしの身体で練習してみましようか？　そこに腰かけてください」

ターニヤが指し示したのは、調理用の台だ。

現在は片づけられており、ただの六人がけのテーブルのようにも見える。

「え、ええ!!!」

びっくり仰天するセドリックとは対照的に、ターニヤはどこまでも冷静だった。

「侍女や針子にお願いするよりも、わたくしが練習台になるほうが手っ取り早いでしょう。さあ、早く」

ごく当たり前に命じられたセドリックは、事態をいま一つ理解できないままに、調理台の縁に軽く腰をかけた。

「それでは、失礼」

セドリックに背を向けたターニャは、その股間に腰かけるようにして寄りかかってきた。ふわつと高級感のある香水の匂いが、男の鼻腔をくすぐる。

「わたくしを背後から抱き締めてください。お嬢様は基本的に背後から責められるのが好みです」

セドリックは言われた通り、背後から抱き締めた。細い腹部の上あたりで手を組む。

「こ、これでいいですか？」

「ええ、少しお待ちください」

声を裏返らすセドリックとは対照的に、どこまでもクールなターニャはドレスシャツの第二ボタンと第三ボタンを外すと、腹部に置かれていた左手を持って、中に入れさせた。

「おっぱいを揉んでください。お嬢様に比べると、少々物足りないでしょうが……」

「そ、そんなことは……」

ワインレットのシンプルなブラジャーの胸元から手を入れて、直接、乳房に触れた。

（お嬢様より確かに小さいけど、手のひらにぴったりフィットするとか、これはこれで悪くない）

手に吸いつくような肌触りに夢中になり、揉みしだいていると、ターニャが注文を付けてきた。

「おっぱいは柔らかく全体を揉みほぐすのは気持ちいいですが、女の身からするとそれほど気持ちよくはありません。性感帯は先端の乳首にありますから、そこを重点的にお願い

します」

「しよ、承知しました」

言われた通りセドリックは両手の親指と中指の間に、ターニャの乳首を抓むと、キュツキュツと扱き立てた。

たちまち乳首が何倍にも膨張してくる。

「ああ、乳首は勃起したからといって、それで終わりではありません。むしろ、勃起した乳首が敏感なのです」

ターニャの声が多少艶めかしくなった。興奮したセドリックは執拗に先輩執事の乳首を責め立てる。

クールビューティーなお姉様の息は上がり、腰がモゾモゾと動く。

「はあ、はあ、はあ……女は乳首だけでイクことも可能なのです。ん、ですが、いまはより効果的な方法をお教えします」

セドリックの腰から多少、腰を上げたターニャは、自らのズボンを太腿の半ばまで引きずり下ろした。

中からはブラジャーと同じワインレット色のショーツがあらわたとなった。

飾りっ気がなくシンプルだが、ぴったりとフィットした様はスタイリッシュで、ターニャによく似合っている。

「……」

セドリックが息を飲んで見つめる中、ターニャは赤いショーツもまた太腿の半ばまで下ろす。

ヌラーとショーツと股間の間に、粘液の糸が引いた。同時に、ふわつと頭髮と同じ、赤紫色の陰毛が立ち上がる。

(うわ、涼しげな顔とは裏腹に、陰毛は濃いんだ。それに凄い濡れ方！)

濡れた内腿を閉じたターニャは、さすがに恥ずかしそうに頬を染めながら説明する。

「先ほどセドリックが失敗したのは、いきなり穴に指を入れようとしたからです。男に慣れた女なら違うのですが、お嬢様のような未通女にとって、そこに指を入れられるのは大変不快です」

「そ、そうだったんですか？」

反省するセドリックに、ターニャは論じて聞かせる。

「はい。処女膜に触れられると痛いですし、やはり女にとって神聖な部分ですから、指で破られるのは、避けたいのが本能です」

ターニャに淡々と説明され、セドリックは自分の無粋さを恥じた。

そんな後輩を後ろ目に見たターニャは白い手袋に包まれた右手で、セドリックの右手を取ると、自らの股間を握らせる。

「穴を弄られなくとも、女は充分に感じるができます」

手のひらにもさつとした陰毛と、指先に熱い汁の感覚がくる。

「そのまま激しく前後に擦ってください」

「こ、こうですか？」

セドリツクは言われるがままに、右手を前後に動かした。

「あ、あ、あ、あ」

シヤリシヤリシヤリシヤリ。

陰毛が掻きむしられ、クチュクチュと熱い液体が指先に滴る。

同時に左手でターニャの左の乳房を揉みしだき、乳首を抜く。

「ああ、凄い、やはり、自分でやるよりも気持ちいい♪ ああ、こんなに濡れるなんて：

：

オフィリアのオナニーの手伝いをしているターニャだが、あくまでも一方通行。自分がやられたことはない、ということなのだろうか。

男に股間と乳房を弄ばれたターニャは惚けた顔で、セドリツクに身を任す。

（あのクールなターニャさんが、こんな風になるなんて。ほんと凄い濡れ方）

日常生活では決して見ることでできない、女の生々しい表情に否応なく男は興奮する。

「ターニャさん、股間にコリコリしたものがありません。こ、ここがクリトリスですか？」

「そ、そうです。女の急所です。そこを掻き上げるようにして左右に捏ね回してください。

さすればわたくしも、お嬢様もあつという間に気をやります」

「こうですか？」

コリッコリにシコリ立っているクリトリスを、セドリックは濡れた指で抓んだ。

「あぁ♪」

やはりクリトリスは女の急所なのだろう。ターニヤの身体がビクリと震えた。しかし構わず、教えられた通りに、クリトリスを左右に動かした。

「ひい、ひいあ、ひいあああ」

男に弄ばれて、ターニヤはおよそらしくない悲鳴を上げて悶える。

（左手で乳房、右手で股間つて、ターニヤが、お嬢様のオナニーを手伝う時の責め方そのままだ）

あるいはターニヤが、自分を慰める時も、このスタイルなのかもしれない。

（ターニヤさんのオナニーか。クールな顔をしていても裏ではオナニーぐらいしているだろう）

ますます興奮したセドリックの指使いは激しくなる。

「も、もう、もうイク、イキます。イクイクイクイク、イク——ッ!!!」

牝叫びを張り上げたターニヤは、セドリックの腕の中で身を固くし、そして脱力した。タラタラタラ……。

セドリックに押さえられた股間から大量の粘液が滴る。

「ふう」

一つ溜め息をついたターニヤは、セドリックの腰から立ち上がると、向き直った。

ドレスシャツの胸元を開き、白い乳房を露呈させ、ズボンを半ばまで下ろし、濡れた股間を晒しながらも、執事らしい気取った仕草で口を開く。

「女に奉仕する時の基本はこれです。いまのようにご奉仕すればお嬢様も満足されます」  
「わかりました。ご伝授ありがとうございます」

セドリックもまた、執事らしく大仰にお礼を言う。

これでレッスンは終わりかと思われたが、ターニャは意味ありげな視線をセドリックに向けた。

「それはそうと、ここからは執事としてのレッスンではなく、個人的な質問なのですが……。これからその堅いものはどうするつもりですか？」

頬を染めたターニャの視線は、セドリックの股間に向いている。

そこはターニャが垂れ流した愛液でぐっちよりと濡れている上に、中からはちきれんばかりにテントを張っていた。

後でひそかに自慰するしかないのだろうか、それを女性に言うのは憚はばかられる。

返事ができないでいると、視線を泳がせながらターニャが口を開いた。

「よろしければ、わたくしが処理いたしましょうか？」

「ターニャさんっ!？」

白い手袋をした右手で口元を軽く押さえながら、ターニャは恐る恐る語る。

「お嬢様のご命令は、あくまでもセドリックに、女性のオナニーの手伝いを教えることで

す。ここからはわたくしの個人的な申し入れです。ですから、不要と言うのなら、断つてくれて構いません」

ここで一度口を閉じたターニャは、視線を泳がせながら、自信なさげな声を出した。

「わたくしが抜いて差し上げましょうか？」

「……いや、そうしてもらえると、もちろん嬉しいですけど……でも、どうして？」

完璧な仕事人間かに思われたターニャの申し出に、セドリックは困惑する。

「わたくしも女ですから。そのような状態になったものを見過ごすのは気が引けます。それともわたくしに抜かれるのは嫌ですか？」

「嫌だなんて、とんでもない。嬉しいです」

感激したセドリックは反射的にターニャを抱き締めると、その唇を奪った。

「うっ、うん、うむむ……」

夢中になって唇を奪ったが、これはセドリックにとってファーストキスである。

なんだかよくわからなくて、ひたすら押しつけた。

ターニャのことを、好きか嫌いか、と聞かれれば考えたことがなかった、というのが正しいだろう。

子供のころは普通に綺麗なお姉さん、と思慕っていたし、いまは尊敬できる上司という以上のことは思っていないかった。

しかし、いまどうしようもない愛しさが込み上げてきたのだ。

「っんは！ はあ、はあ、はあ」

ただ単に唇だけを押しつけあう接吻が終えたセドリックが口を離すと、至近距離で見つめあいながら、ターニャが囁く。

「今度はわたくしがやってあげますね」

白い手袋に包まれた両手で、セドリックの執事服の胸元を開いたターニャは、胸板に接吻し、さらに腹部。跪くとズボンを引きずり下ろした。

ぶるんつと唸りを上げて逸物が外界に姿を現す。

それを白い手袋で握り締めたターニャは、軽く扱くと、頬を当てて溜め息をつく。

「温かい……」

「ターニャさん」

困惑するセドリックに、ターニャは微笑を返す。

「お嬢様の言い分ではありませんが、わたくしだって生身の女です。毎日、あんなの見せつけられていたらたまりません。お嬢様の奉仕をしながら、何度お嬢様を放り出して、このおちんちんにこうやって頬ずりしたいと思ったことか。そして、啜えたいと思ったことか」

感極まった様子のターニャは肉棒の先端からパクリと啜えた。

「う、う、う」

ターニャは夢中になって肉棒を啜り上げている。

(き、気持ちいい。おちんちんを舐められる、いや、吸われるのってこんなに気持ちよかったのか)

初めてのフェラチオ体験はこの世のものとは思えぬほどに気持ちいいのだが、どうもセドリックは貧乏性だったようだ。

一方的に奉仕されているのは落ちつかない。

「ターニャさん。僕もターニャさんのオマ○コしゃぶりたいですから、上に乗ってください」

調理台に端に腰をかけてターニャに逸物をしゃぶられていたセドリックは、そのまま仰向けに倒れた。

「わかりました」

年下の男の意図を察したターニャは逸物を啜えたまま、調理台の上に乗った。そして、セドリックの顔を跨ぐ。

顔の左右に膝をついた女の股間にセドリックは両手を伸ばし、ゴワゴワの陰毛を掻き分けて、左右の親指で陰唇を開く。

「これがターニャさんのオマ○コなんです。とつても綺麗だ」

「ああ、恥ずかしい。お嬢様の美しいオマ○コを見た後に、わたくしのものなど……」

「お嬢様は太陽。ターニャさんは月でしょ。比べるようなものではないでしょう」  
そう論じたセドリックは、ターニャの陰唇に吸いついた。

爽やかな酸味と潮の味が口内に広がる。

「ああ、そうですね。うん」

ターニヤもまた貧乏性なのだろう。一方的に奉仕されるのは落ちつかないらしく、逸物に吸いついた。

男女が互いの性器を吸いあうシックスナインだ。

「ん、んん、うん……」

ピチャピチャピチャピチャ……。

広々とした調理場に、粘着質な水音が響き渡った。

（う、ターニヤさんのオマ○コ汁美味しい。ターニヤさんっていつもクールでカッコイイのに、オマ○コはこんなにイヤらしい味がしたんだ）

味覚としてはそれほど美味しいものではないのだが、牡の本能を刺激する味だ。

女性上位のシックスナインで、男女の執事は快感を貪り盛り上がった。

丁寧な、濡れた媚肉を味わったセドリツクの舌先は、自然と肉壺に向かう。

（あ、ヒクヒクしている。ここにおちんちんを入れるんだよな。さつきオフィーリア様の中に指を入れようとして怒られちゃったけど。でも、入れたい！）

蜜壺に舌を押し入れようとする、不意にターニヤは逸物から口を離して叫んだ。

「いけません！」

驚いて口を離して、腹の間を覗く。

するとターニャは恥ずかしそうに告白した。

「わ、わたくしも、処女ですから、舐めるのは表面だけにしてください……」

「あ、はい。すいません」

あのオフィーリアの側近として仕事一筋に生きてきた女である。恋人など作る暇がなかったということだろう。

「それじゃ、クリトリスを中心に舐めます。ここは舐めていいんでしょ」

「はい。あ、剥くのは……ああ、す、すごい……」

ブルブルブル……。

喘ぎながら、ターニャの下半身が震える。

そのクリトリスは舐めているうちに剥けてきた。それと気づいたセドリツクは執拗に舌を入れて、強引に剥いてしまった。

剥き出しになった赤い肉真珠を、口に含みペロペロと舐め回す。

「ひい、ひい、ひい……うむ」

泣き声のような嬌声を上げていたターニャだが、後輩の男に一方的に弄ばれるのは年上女の面子に係わるとでも思ったのが、再び強引に肉棒を口に含み啜り上げてきた。

（うお、ターニャさんの吸い上げきつい。ザラザラの舌が絡みつく）

ターニャは口奉仕に集中することで、己が身を襲うクリトリス責めを忘れようとしているかのようだ。

その気持ちはセドリックも同じだ。

簡単に出したのでは、男としてみっともない気がする。

(いや、この快感をもっともっと楽しみたい。すぐに出すなんてもったいない)

セドリックは襲いくる射精欲求と戦いながら、ひたすらにクールビューティーな先輩執事の剥き出しの淫核を、舌先で捕えると、高速で舐め回した。

ドブドブドブ……。

蜜壺が収縮を繰り返して、熱い体液を垂れ流し、セドリックの顔にかかる。肉棒のほうもビクンビクンと痙攣して、先走りの液を垂らしていた。

男と女の意地の張りあい、先に降参したのはセドリックだった。陰唇から口を離して叫ぶ。

「ターニャさん、もうダメです。イク」

しかし、ターニャは構わず逸物を吸った。

(あ、ターニャさんの口の中で出る)

申し訳ないと思うが、もはや我慢できる状態ではない。クールなお姉様の熱い口内で逸物は爆ぜる。

ドヒュ！ ドビュ！ ドビュッ！

(あ、吸われている)

射精している最中に吸引される。自分の手で弄る時には決して味わえない感覚だ。

まるで尿道がストローで、睾丸から直接、精液を吸い上げられている気分だ。

ゴクン、ゴクン、ゴクン。

喉を鳴らして飲んだターニャは、射精が終わると、逸物から口を離し、股の下のセドリツクの顔を見て舌舐めずりをした。

「ふう、お嬢様がおっしやる通り、デリシヤスト」

「はは……」

ターニャがおどけたり、冗談を言うのは珍しい。

セドリツクは軽く笑った。ターニャは半萎えになった逸物を弄びながら切なげな吐息をつく。

「しかし、これは本来、舌で味わうものではなく、オマ○コで頂いた時に、本当の味がわかるものだと伺っております」

「そ、そうでしょうね？」

ターニャの言わんとしているところをセドリツクも、なんとなく察することはできた。しかし、その一步を踏み出す勇気がない。

ターニャのほうは力を失った逸物を弄び、口に含んできた。逸物はたちまちのうちにギンギンに再勃起してしまふ。

濡れ輝きながら隆々とそそり立つ逸物を愛しげに白手袋で撫でながら、ターニャは提案してくる。



「そういうことでしたら」

「たったいま射精したばかりの逸物が、もう何事もなくギンギンに勃起している。それを陰唇に添えた。」

「あ、待って。いい、勘違いしてはダメよ。これはあくまでもオナニーだからね。名門バタフライ家の当主たるものが、使用人とセックスだなんて、冗談じゃないわ。わたしは肉バイブを使ってオナニーしたいだけなのよ」

「はい、承知いたしましたお嬢様」

それがセックスとどう違うのか、セドリックにはよくわからないが、もはや止まらない。礼儀正しく応じた不埒な執事は、女主人の陰唇に向かって腰を落とした。

ズブリ。

亀頭部がお嬢様の体内にもぐり込んだ。

「ああっ!!」

オフイリアは反射的にずり上がって逃げようとした。いわゆる処女のずり上がりだ。

しかし、セドリックは逃がさなかった。

オフイリアの両膝の裏をがっちりと押さえつけると、強引にねじ込む。

「ちよ、ちよつと、痛い、痛い、痛いわ、あっ!!」

オフイリアは必死にセドリックの肩を掴んで自重を求めたが、男の獣欲に負けた。メリメリメリ……。

狭い肉道を押し開きながら、肉棒はもぐり込んでいく。

「ひいひいひい!!!」

菌茎が見えるほどに口元をひん曲げて悲鳴を上げたオフィーリアは、両手両足を使ってセドリツクの身体を抱き締めた。

セドリツクの胸では豊麗な肉の塊が二つ押しつけられて潰れている。

(ああ、これがお嬢様のオマ○コの中、きつい)

破瓜の最中であるから、体中に無駄に力が入っているのだろう。ターニャも最初はこうだった。ここからこなれていったのだ。

ターニャの体内も気持ちよかったが、長年慕ってきた女の体内に入っていると思うと、気持ちよさも格別である。

「お嬢様、お嬢様のオマ○コは最高です」

「と、当然でしょ」

「だから、もう我慢できません。無礼のほど平にお許しのほどを」

牡としての征服欲を抑えかねたセドリツクは、本能の赴くままに腰を使い始めた。

「ちよ、ちよつと、そんな、太いもので、ゴリゴリされたら、ああ、オマ○コ、広がっちゃう!」

いまは我が儘お嬢様の泣き言など聞いている余裕はない。

頭の中がかつと燃えるほどの興奮状態のセドリツクは、ただひたすら激しく掘削する。

「ひい、ひい、ひい、ひい」

目の前の男に抱きついて啼くオフィーリアは、ただただ犯される牝であった。

（くっ、お嬢様のオマ○コの中の襷つて凄い。まるでオマ○コの中で蝶を飼っているみたいだ）

その豊富な襷に包まれて、興奮状態にあるセドリックはたちまちのうちに限界に達した。

「お嬢様っ、イきますっ」

雄叫びとともに、セドリックは逸物を最深部にまで押し込んだ。

「はがっ!？」

子宮口を龟头部で押されて、オフィーリアは目を剥き、涎を噴く。

そして、射精が起こった。

ドビュッ！ ドビュッ！ ドヒュッ！

「らめ、らめ、すごい、すごい」

子宮口に精液をぶちまけられるという、女の根源的な喜びに、破瓜の痛みに涙していたオフィーリアは、全身をぶるぶると震わせた。

※

「まったく、主人のオマ○コの中に、こんなに出して……不埒な執事だわ」

ことが終わって逸物を抜かれたオフィーリアは、花畑に腰を下ろしたまま、上体だけを起こすと、自分の膣穴から溢れ出す白い液体を掬い上げる。



「失礼いたしました」

射精したことで我に返ったセドリツクは、花畑で土下座している。

「まあ、いいわ。許してあげる」

寛大に応じたオフィーリアは、赤い液体の混じる白い液体をペロリと舐めた。

「やっぱり、女の身体には男が馴染むってことね。今後、わたしのオナニーの手伝い役はあなたよ。よろしくって？」

「は、承知いたしました」

大敵の来襲を前にバタフライ家の主従は、こうして絆を深めた。



「いや、その……あたし……あの」

菌切れの悪いシャーリーの姿に、オフィーリアは困惑する。不意にある可能性に気づいた。

「まさか、初めてというわけではないのでしょうか？」

「……」

シャーリーが返事をしなかったことに驚いたオフィーリアは、慌てて命じる。

「セドリック、確認して」

「はい」

愛蜜のトロトロと溢れる肉壺にセドリックは恐る恐る右手の中指を入れた。

「あっ」

ぷるりつとシャーリーは肢体を震わせたが、指はあっさりに入った。

「……通じてはいるようです」

「う、嘘よ。あたし男経験なんて！」

反射的に怒気をあらわにしたシャーリーだが、直後に後悔したようだ。

男が童貞であることを恥ずかしく思うように、女もまた処女であることを恥ずかしく思うものなのだろう。耳まで真っ赤にして顔を背けた。

しかし、その告白にオフィーリアたちも、予定が外れて茫然とする。

ややあつて、オフィーリアが口を開く。

「もうご冗談を、シャーリーお姉様って二十代半ばですわよね。それで男性経験がないだなんて……」

発展的な性生活を送るオフィーリアには、到底信じられなかったらしい。

（でも確かに指先に処女膜の感じはない。しかし、シャーリーさんが嘘を言っている雰囲気でもない）

そこでセドリックはある可能性に思い至った。

「ああ、これは失礼いたしました。わたしの見立て違いでございます。女騎士の方々というのは、普段から馬などに乗ることもあって、自然裂傷してしまうことが多いのだとか」

セリユーンの見立てに、瞬きをしたオフィーリアもまた納得したようだ。

「もう、シャーリーお姉様ってほんと真面目でしたのね。それにしても噂に聞くセリユーン王も意外とだらしがない。こんなにいい女を放置するだなんて……」

「陛下は……その、若いころは酷かったと聞き及びますが、即位してからはそんな無闇に女を口説くような真似はいたしません」

シャーリーの主張に、オフィーリアは蔑みの眼差しを返す。

「ふうん、まあ、それはそれとして、シャーリーお姉様ほどのいい女が、このお歳で膜付きだなんて、可哀想で見られてられませんわ。セドリック、とつととぶち込んで差し上げて」

「え、ちょ、ちよつとつ!!」

オフィーリアの無茶苦茶な主張に、シャーリーは慌てて逃げようとするが、セドリック

にとつて主人の命令は絶対だ。

「では、入れさせて頂きます」

慇懃無礼に応じたセドリックは、シャーリーの両腿を押さえて腰を落とした。  
ズブッ!

処女なのに、処女膜のない膣穴は、あっさりと年下の男根を飲み込んでいく。

「あ、ああ……」

初めての異物挿入の違和感から 口を開けずにはいられなくなったのだろう。シャーリーは大口を開けて、犬のように舌を垂らした。

(し、締まる)

できる女は、膣洞の出来もいいものらしい。

(しかし、締まるだけだ。お嬢様の絡みついてくるようなオマ○コに比べれば、耐えられる)  
よく締まり、贅肉もザラザラしている。普通に考えればシャーリーの膣洞は名器と言つ

ていいだろう。オフィーリアのほうが特殊すぎるのだ。

朝な夕なにオフィーリアの凶悪膣洞で鍛えられた身である。いまさら少々の優れた女性器で我を忘れるほどに柔ではない。

とりあえず最深部まで打ち込んだところで耐えていると、オフィーリアはシャーリーの

頭上から興味深そうに観察する。

「あまり痛がっている様子はありませんわね」

「はい。血もほとんど出ておりません」

いつの間にか傍らに寄っていたターニヤが、男女の結合部を確認して応じる。

（うわ、ターニヤさん、いつの間に!?!）

黙って見ているのに飽きたのだろうか。いや、おそらく仕事熱心な人だから、主君の目的を遂げるための手伝いをしたくなつたのだろう。

「破瓜の痛みがないってこと……それは、羨ましいわね」

初体験の時の痛みは、オフィーリアにとって結構、トラウマになっているのかもしれない。心の底から羨ましそうだ。

「それなら、遠慮はいらないわ。セドリック、当初の予定通り、ガンガン楽しませて差し上げて」

「了解いたしました」

「あ、イヤ……」

もうすっかり凜々しい女騎士としての面影を失ったシャーリーの悲鳴は無視して、セドリックはゆつくりと小刻みに腰を使い始めた。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あぁあ」

九回小刻みに動いて、女が慣れて油断しているところを、がつつり子宮口をぶち抜くよ

うに最深部まで打ち込む。

この繰り返しに男勝りの女騎士の肉体は、少しずつ蕩けていく。いわゆる九浅一深の腰使いだ。

「あ、やだ、なに、この感覚……ああ♪」

いくら処女だったとはいえ、二十代も半ばである。男を迎え入れる器として完成しているから、馴染むのも早い。

我を忘れたシャーリーは両手両足でセドリックにしがみついてきた。

「どお、うちの執事のおちんちん、なかなかいい具合でしょう？」

「ふ、太い、大きい、堅い、ゴツゴツしている」

泣きながら喘ぐシャーリーの姿に、オフィーリアは満足する。

「うふふ、気に入ってもらえて嬉しいわ。でも、バタフライ城でのもてなしは、この程度では終わりませんわ」

ニタリと笑ったオフィーリアは、側近である女執事に真顔で合図を送る。

そして、二人は同時にシャーリーの乳首を口に含んだ。

「ひいああああ、そんな、いま、ああ、そんなところを、いや、なに、この感じ、ひいあ!!」

左の乳首はターニヤ、右の乳首はオフィーリアだ。

処女膜はなかったようだが、初めて男根を受け入れている状態である。その上左右の乳

首をそれぞれ同性に吸われて、性感の許容量を超えてしまったらしい。

惚けたシャーリーはあられもない嬌声を上げる。

「うほ、うほほほ」

「あらあら素敵。堅苦しい女騎士としての鎧が剥げて、生の女の顔を見せて頂いていますのね」

オフィーリアの嘲笑に、セドリックも全面的に賛成した。

（ああ、シャーリーさんったら、せっかくの知的な美貌が台無しだ）

しかし、そうしたのが自分の逸物だと思いと、男としては否応なく盛り上がる。

自然と腰使いは激しくなり、同時にキュッキュッキュッとよく締まる正統派な膣洞が、逸物にまとわりついてきた。

（気持ちいい。この締めりはやっぱ鍛えられた女騎士ならではかな）

オフィーリアのゴージャスな膣洞や、ターニャの狭くブツブツの膣洞もいいが、シャーリーの荒々しい膣洞の締めりもまた気持ちいい。

「あ、ダメ、また一段と、大きく……裂ける、裂けちゃう」

シャーリーがいち早く敏感に察したように、睾丸から溢れ出した精液が肉棒を駆け抜けてきた。

（く、やばい。もう出そうだ）

必死に気合いで留めるが、新鮮な肉感に肉棒が溺れてしまっている。

それに、いくら我慢しても、初体験中の女を絶頂まで持っていく自信はなかった。

セドリツクが射精しようとしていることを、すでに何度も肌を合わせている女たちは、敏感に察したのだろう。もっと我慢しろ、と言いたげに無言で睨んでくる。

（お嬢様も、ターニャさんもそんな冷たい目で見ないでください）

脂汗を流しながらも、必死に腰を使っていたが、やがては限界に達する。

「お嬢様、そろそろわたくしイきます」

セドリツクの涙声の懇願に、オフィーリアは軽く溜め息をついてから頷いた。

「よくつてよ。避妊の必要はないわ。子宮にたっぷりと入れてあげなさい」

その指示を聞いて、悶絶していたシャーリーは目を剥く。

「そ、そんなことをしたら赤ちゃんがつ!!」

「ああ、そのことでしたら心配無用ですわ。赤ちゃんができたら、責任を持ってバタフライ城で預かるから」

オフィーリアの的外れの宣言に、シャーリーは目を剥く。

その耳元でオフィーリアは、女悪魔のように囁く。

「シャーリーお姉様も女と生まれたからには、子供を産んでみたいと感じているのでしょうか？」

「……」

目を剥くシャーリーに、オフィーリアは続ける。

「聞くところによるとうちのセドリックとシャーリーお姉様は浅からぬ縁があるとか。いつぞやは冗談めかしておりますけれど、セドリックの子供が欲しいと言っておりますものね」

「あ、あれは冗談……」

「でも、その戯れ言の中に、少しだけ本音が混じっていたとお見受けしますわ。だから、こうやって無理やり犯されるのも嫌ではないのですよ。というよりもシャーリーお姉様は、進んで股を開いたように見えましたわ」

オフィーリアの決めつけに、シャーリーはびくつと震えた。

「好きな男の子供を腹に宿し、産む。これは女にとって至上の幸せでしょ？」  
「……」

「こっそり産んでしまえばいいんですわ。子供はバタフライ城で引き取りますからご心配なく、シャーリーお姉様は産みっぱなしでいい。その後、好きな男ができたら、結婚すればいい。お子様のことは誓ってばらしませんわ」

その悪魔の囁きにシャーリーは硬直してしまっている。それと見て取ったオフィーリアは、忠実なる執事に命じる。

「さあ、セドリック。シャーリーお姉様を妊娠させてあげて」

「了解しました。お嬢様」

オフィーリアが説得する間、必死に射精欲求と戦っていたセドリックは、腰使いの速度

を一気に上げた。

パンツ！ パンツ！ パンツ！ パンツ！

男の腰と女の恥丘が激しくぶつかりあう。

「ひい、妊娠？ 妊娠する？ あたしが妊娠するっ!？」

混乱するシャーリーにお構いなく、セドリックは獣性剥き出しの荒々しい突貫を行う。

おかげでシャーリーの理性の針はぶっ飛んでしまったらしい。ただただ泣き喚いている。

「出ますっ!」

「よくつてよ。シャーリーお姉様の子宮にたつぷりと注ぎ込んで、元気な赤ちゃんを妊娠させてあげなさい」

犯されている本人ではなく、見守る他人が勝手に許可する。そして、セドリックは、その他人の指示に従った。

「はい、子宮に出しますっ!」

セドリックは逸物を思いつき押し込み。尿道口の先端が、子宮口に嵌まった状態で射精した。

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！

「はあああああ、熱い、は、入ってくる。妊娠、妊娠しちゃうう」

ビク、ビクビクビクビクビク!!!

初めての膣内射精の感覚に、シャーリーは全身を激しく痙攣している。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載は厳禁です。無断で複製・転載は法律の範囲内で厳禁です。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!